

研究委員会企画シンポジウム 3

かな文字の読み・書きの習得における
音韻的意識の役割

企画者・司会者：玉瀬耕治（奈良教育大学）・内田伸子（お茶の水女子大学）

話題提供者：天野 清（中央大学）・大六一志（武蔵野女子大学）・高橋 登（大阪教育大学）

指定討論者：秋田喜代美（立教大学）・針生悦子（青山学院大学）

企画趣旨

天野により、幼児・児童のかな文字読みの習得の前提として、音韻的意識の役割が重要であることが見出されて以来、多くの研究が輩出され、一定の知見がもたらされるようになった。これらを概観すると、研究者によって「音韻的意識」の捉え方には差があること、かな文字習得におけるその役割や機能の仕方についても微妙な不一致があることなど、検討の余地がある。これらを明確にし、基礎的研究を踏まえて音韻的意識の形成の教育的意義について検討し、さらに、漢字など他の文字の読み・書きのメカニズムを探るための今後の研究展望を得ることを目的として討論する。かな文字習得の問題をめぐる多くの実績をあげてこられた研究者達を話題提供者、指定討論者に迎え、話題提供の元となる各自の論文を読み合い、論点を明確にした上で議論の場に臨む「ペーパーシンポジウム」の形式で行いたい。

「かな文字読み・書きの習得と音節分析の役割」

天野清（中央大学）

筆者は1960年代から一連の研究を通して幼児・児童のかな文字習得の基礎には日本語の音節分析の発達があり、これらの発達と読み書きの習得との間に独自の相互作用があることを示してきた。

さらに、その複雑な諸過程を明らかにするため1991年より、三歳児を対象に3年間の定期的な縦断調査・実験を実施し、音節分析とかな文字習得の間の因果関係、語の読解過程の発達、音節分析の発達に作用する諸要因について分析した。その結果、発達の早い幼児は三歳台より音節分析とかな文字を習得すること、発達の時期とそのテンポに著しい個人差があること、全体として、ゆっくりしたテンポで発達が進むことが見出された。さらに、1)音節分析の発達はかな文字読みに先行し、1字読めるようになった時点で全ての幼児は、最も低い場合でも、語頭音の抽出が可能（I③段階）である。2)順序性の理解の発達が音節分析の発達に先行する。3)語の拾い読みから単語読みへの移

行過程は音節構造分析の内面化と総合過程が結びついた複雑な過程で、総合過程が音声化される単語読みに移る前に、予備分析と総合過程が合わさった第二次の拾い読みがあること等が示された。

シンポジウムでは、1987年の論文（図1,2）に基づき、語の読み・書き過程における音韻（節）分析の果たす役割を具体的に説明するとともに、特に、1)音節分析とかな文字の読み書き習得との因果的相互関係、2)語の読み、理解過程における音節分析と音節総合の役割に焦点をあてて、新しい実験資料を加えて論じる。

なお「かな文字習得」は「単に文字の『音価』（「あ」を/A/と読めるようになること）ではなく、単語の意味を捨象し、音的要素に定位し、語の有意なコトバを構成している様々な語音の中から一定の音韻（節）を抽出し、それを文字記号に定着していく過程」（天野 1970）と定義しており、大六氏の「かな文字の呼称」とは本質的に異なるものである。精神発達遅滞児の音節分解・抽出行為が未習得段階での「かな文字の呼称」は機械的連合メカニズムによる学習であり、かな文字の特質に対応した学習メカニズムに変換される以前の「原始的読み」である（天野 1977）と考えられる。

かな文字教育における音節分析の教育の真価は特殊音節の指導にあると考えられ、大六氏、高橋氏の「モーラ意識」という枠組みでは特殊音節の指導は取り扱えない点にも注意すべきである。

【文献】◆天野 清 1987「音韻分析と子どものliteracyの習得」『教育心理学年報』第27集、142-164。◆天野清 1993「子どもの読みの習得過程についての発達の・実験的研究」『平成4年度文部省科学研究費(B)研究成果研報告書』

モーラ意識はかな文字習得の必要条件か

大六一志（武蔵野女子大学）

本論では、音韻意識の中でも、特にモーラ（日本語の音節のこと）に対する意識（以下「モーラ意識」と略す）を扱う。かな文字読みの習得においてモーラ意識が重要な役割を果たすことは、天